

DEBUT 首長

和歌山市長 尾花 正啓氏

若者が戻る就職環境整える 中3まで入院無料化を検討



おばな・まさひろ 1953年和歌山県美里町（現紀美野町）生まれ。東京大学工学部卒業後、80年和歌山県庁入庁。ほぼ一貫して土木畑を歩み、道路局長、県土整備部技監を経て12年県土整備部長。13年11月に県を退職し8月の市長選で当選。趣味は犬を連れてのウォーキングと本気の実験園。61歳。

和歌山市 江戸時代から紀州徳川家が治める城下町で、和歌山県北部に位置する県庁所在地。中核市に指定されている。人口37万人は県全体の約37%を占める。人口は減少傾向が続いており、ぶらくり丁をはじめ、かつての中心市街地は活気が失われて久しい。

——公約は「産業を元気に」「まちを元気に」「人を元気に」の3つ。まず産業を掲げている真意は。

一番重要なのはもちろん「ひと」だ。だが、そのためにはまず雇用の確保が大事。和歌山は県外の大学への進学者の割合が全国で最も多い。その若者に戻ってこようと思ってもらうには産業振興が必要だ。特に介護、看護など人手の足りないところに就職してもらえるような環境づくりに取り組む。

ほとんど時間がない中、9月補正予算に中央卸売市場の施設整備事業に1700万円を盛ったのも産業振興のため。市場の建て替えだけでなく、道の駅を併設し、観光の機能を持たせたい。そのための基本計画を策定するものだ。

——中心市街地の活性化は長年の課題となっている。

（ドーナツ化が進み）郊外に広がったまちを縮小しようとは思っていない。ただ中心部は魅力のある、そこに住みたくなるようなところでなければならぬ。それが市全体の魅力にもなるからだ。教育機関があり、子育て支援や高齢者のための施設があり、様々な公的機能を持つ。さらに市のシンボルである和歌山城を活用したイベントからくる楽しみがある。居住、便利さにぎわいといった要素を持った魅力のある中心市街地を追求したい。

これも9月補正予算に700万円を計上した。来年から国の支援を受けられるよう、まちなか居住に向けてどこにどのような施設をもって来るかを検討する「都市機能立地適正化」事業に着手するためだ。

——人口減少は県都和歌山市でも止まる気配がない。

「人を元気に」では少子化対策に重点を置く。子どもがいなくなるというのは大変な問題だ。子育てのしやすい環境を整える必要がある。現在は小学校6年間で終わる入院医療費無料化を

来年度から中3まで広げられないか、検討を始めている。就学前後の待機児童をなくす取り組みも大切だ。幼保連携型認定こども園を充実させるとともに、働く時間が長くなっている現在、学童保育の施設を確保できず、仕事をやめているケースにも対応する必要がある。施設数の差などによる地域間のアンバランスを早く解消していきたい。

元気に暮らしの前提となる安全・安心を守るため、防災対策も重要な要素だ。国の地域計画策定モデル調査実施団体に選定されたことを受けて、県と密接に連携していくべきと考え、就任して即、県と「国土強靱化共同本部」を立ち上げた。ハード面の対策は県、それを生かしてどう逃げるかなどソフト対策は市が担う。今後もより効率的だと思える分野では積極的に県と連携していきたい。

（聞き手は

和歌山支局長 土田 昌隆）